『語用論研究』第 21 号(2019 年) pp. 1-18
© 2019 年　日本語用論学会

〈特別寄稿論文〉

伝達意図とアドレス性*

伝　康　晴
千葉大学

In this article I focus on the cases in which utterances and/or gestures are directed at certain addressees but their illocutionary acts are directed at *indirect targets* other than the addressees. I illustrate how such indirect addressing is achieved through micro-analysis of conversational interactions in three different social settings, including mother-children education situation at home, preparatory activity for a festival in the field, and teacher-students instructional situation at a martial-art gym. I examine the applicability of Clark and Carlson's (1982) *Informative-First Hypothesis* to these examples, and discuss possible extensions of the model in several aspects.

キーワード： アドレス性、間接的な標的、伝達意図、告知優先仮説、相互行為

1. はじめに

我々の日常のコミュニケーションには、話し手から聞き手になんらかの情報を伝達する営みが含まれる。このような情報伝達的なコミュニケーション観の古典的なモデル（Shannon and Weaver 1949）では、情報伝達は発信者と受信者のあいだで共有されたコード体系を用いてなされると考えられていた。しかし、このモデルは多くの研究で批判され（たとえば、谷 1997）、聞き手による話し手の意図の推論に基づくモデル（Grice 1969; Sperber and Wilson 1986/1995）の可能性が検討されてきた。このモデルは、話し手の意図の聞き手による推論をコミュニケーションの中心にすえ、話し手の側には聞き手のこのような推論の発動を企図する意図があるとした。Sperber and Wilson（1986/1995）は、このような「話し手の意図を聞き手に推論させる意図」といった高次の意図を伝達意図（communicative intention）とよび、それを基礎にコミュニケーションの本質を

* 本稿の内容は、日本語用論学会第 21 回（2018 年度）大会における招待講演をもとにしている。本稿で用いたデータの収録にご協力いただいた野澤組惣代・保存会・三夜講の方々、および、ストライプル市川道場のみなさまに感謝します。また、『日本語日常会話コーパス』からの事例収集には居關友里子さん（国立国語研究所）にご協力いただきました。記して感謝します。

解明しようとした。

これらのモデルは話し手と聞き手のあいだの一対一の関係を前提としている。すなわち、話し手の発話は特定の聞き手に宛てられ、その聞き手はその発話が自分に宛てられていると理解することを前提としている。しかし、3 人以上の参与者が参与する多人数会話においては、これは自明のことではない。発話や行為を特定の他者に宛てる（アドレスする）ことは、コミュニケーションにおけるもっとも基本的な技法の 1 つである。多人数会話において、発話や行為が誰に宛てられているかは、分析者にとってのみならず、参与している当事者たちにとっての問題となる。発話や行為が誰に宛てられたものか理解できなければ、適切な参与者による適切な応答ができないからである。

発話のアドレスに関する研究は、次話者選択の技法やその言語的・身体的資源を中心としてさまざまな議論が行われてきた（たとえば、Sacks et al. 1974; Lerner 2003; 高梨 2016）。その一方で、発話の宛て先（addressee）以外のさまざまな種類の聞き手に関する議論もなされてきた（たとえば、Goffman 1981; Levinson 1988; Clark 1996）。さらに、発語内行為を発話の宛て先以外に向ける可能性も指摘されている。たとえば、Clark and Carlson（1982）は、以下のような事例において、Ann の発話 02（の後半部分）の直接の宛て先は Charles であるが、その（間接的な）発語内行為である依頼は Barbara に向けられていると論じている。

【Clark and Carlson（1982: 337）（10）より】

01　Charles:　((to Ann, in front of Barbara))
　　Ann, what's playing at the theater next week?
02　Ann:　((to Charles, in front of Barbara))
　　Sorry, I don't know. But Barbara does.
03　Barbara:　((to Charles, in front of Ann))
　　Much ado about nothing.

Charles の質問 01 に対する Ann の返答 02 "But Barbara does." は、質問者 Charles や返答者 Ann 以外の第 3 の参与者（傍参与者）である Barbara を文法的構成要素として含んでおり、その Barbara による応答を期待させるものである。実際、この発話の直後では Barbara による応答が自然である。Levinson（1988）は、このように発語内行為を間接的に向ける相手を、発話の宛て先と区別して「間接的な標的（indirect target）」と呼んでいる。[1]

[1] 本稿では、発話や身振りを宛て先（addressee）に「（直接）宛てる」ことと、それが遂行する行為を間接的な標的（indirect target）に「（間接的に）向ける」ことを、異なる動詞を用いて区別する。

本稿では、このように発話の直接の宛て先でない第3の参与者になんらかの行為が間接的に向けられているとみなせる事例に焦点をあてる。さまざまな相互行為場面の収録データからこのような事例を取り上げ、そこで生じていることを記述するとともに、伝達意図とアドレス性の観点から吟味する。これにより、従来のコミュニケーション理論の拡張の方向性を議論する。

2. データ

本稿では、筆者が近年関わっているプロジェクトで収集した以下の3種類の相互行為場面のデータを用いる。

1. 家庭内での親子の教育場面
2. 野外における祭りの準備作業場面
3. 格闘技道場における技術指導場面

データ1は、『日本語日常会話コーパス』モニター公開版（小磯ほか 2019）に収録されているデータの一部である。このコーパスは、日常場面のさまざまな自発的な活動に埋め込まれた会話を調査協力者自身にビデオ録画してもらったデータを収集したものである。自宅や職場・学校、飲食店や公共施設などにおける広範囲の場面や活動を収録している。本稿で取り上げるのは、そのうちの1つで、母親が自宅で小学生の息子2人の勉強の面倒を見る場面である。

データ2は、筆者らがここ数年行なっている長野県野沢温泉村でのフィールドワーク（榎本ほか 2018）からのデータである。野沢温泉村では、毎年1月に道祖神祭りと呼ばれる大きな祭りが行われる。このフィールドワークは、秋ごろから行われるこの祭りの準備作業のおもな場面を調査チームでビデオ収録し、大人数の作業者たちの協働活動や世代間での技能や知識の伝承過程を分析するというものである。本稿では、このうち、10月に行われる御神木伐り出し場面を取り上げる。

データ3は筆者が通っている柔術道場で収録したデータである。本稿では、その中から、指導者が協力者とともに柔術の技を実演しながら、練習生たちに説明を行う場面を取り上げる。協力者は、その日出席している練習生たちの中から選ばれ、どんな技を実演するか事前に知らされていない。そのため、指導者の説明の発話や身振りの中から自分が次にどう動くかのヒントを見つけ出し、指導者との協働的な実演を達成している。

以下、これらのまったく異質な3つの場面で、間接的な標的に発話が向けられる事例を見ていく。

3.　分析

3.1.　家庭内での親子の教育場面

断片 1 は、『日本語日常会話コーパス』モニター公開版（小磯ほか 2019）に収められている会話データの一部である。[2] 母親は、自宅で小学生の息子 2 人の勉強の面倒を見ている。3 人はダイニングのテーブルに向かい、息子 2 人は横並び、母親はその向かい側に座っている（図 1）。年長のたっ君はテキストとタブレットを使って 1 人で勉強している。年少のやっ君はテキストを見て、しばしば母親に話しかけながら、課題に取り組んでいる。やっ君が取り組んでいるのは、「自分 1 人でできること」を選択肢から選んで丸をつけるという課題である。なお、以降の事例においては参与者たちの視線が重要なので、各発話行の末尾に「((→ X))」の形式で視線の方向を示す。

図 1　断片 1 の参与者の配置

【断片 1】『日本語日常会話コーパス』モニター公開版（T003_001）

01　やっ君：　遊び終わったら（0.14）((→テキスト))
02　　自分で片付＞け [る <= は い 丸　] ((途中から、→母親))
03　母親：　　[＞え：それ＜微妙] じゃ(h)な(h)い(h)？((→やっ君))
04　　(0.42)
05　母親：　　ママに言われ＞なきゃ片付け（ない)<= ((→やっ君))
06 →　　= あでもやっ君は片付けるね ((→やっ君))
07　　(0.41)

[2] 本稿では、以下のトランスクリプト記号を用いる。「[」：発話の重なりの開始位置、「]」：発話の重なりの終了位置、「=」：発話間の切れ目のない接続、「(数字)」：沈黙の長さ（秒)、「(.)」：0.1 秒未満の短い沈黙、「:」：直前の音の引き延ばし、「° 文字° 」：小声での発話、「文（h）字（h)」：笑いながらの発話、「＞文字＜」：早口での発話、「(文字)」：聞き取りに確信がない部分、「((→文字))」：視線の方向、「((文字))」：転記者による注釈・説明。なお、人名はすべて仮名である。

08　やっ君：　たっ君だ [よそれ] ((たっ君のほうへ顔を寄せながら))
09　たっ君：　　[俺は？] ((→タブレット))
10　　(0.34)
11　母親：　たっ君だね片付けない° の°（(途中から、→たっ君))

やっ君は「遊び終わったら (0.14) 自分で片付 > ける <」という選択肢を読み上げると、テキストから母親に視線を移しながら、間髪入れずに「はい丸」と答える（01, 02 行)。母親は、やっ君の読み上げ発話の末尾で、「> え : それ < 微妙じゃ (h) な (h) い (h)?」と笑いを交えながら、否定を匂わせる反応を返す（03 行)。少しの間（04 行）の後、母親は「ママに言われ > なきゃ片付け（ない)<」と否定的な内容を明示する（05 行)。しかし、母親はさらに続けて、「あでも」と気づきの標識 (Endo 2018) と逆接の接続詞を発し、いま言った否定的な内容とは反する何かに気づいたことを表示すると、「やっ君は片付けるね」とその内容を言語化する（06 行)。

日本語においては、すでに話題の中心になっている事物は明示せず、省略するのが普通である。ここでの話題の中心は「やっ君」である。しかし、この母親の発話は「やっ君」を明示的に構成要素として含んでいる。また、一連の発話のあいだ、母親の視線はずっとやっ君に向けられている。これらのことから、この発話はやっ君を宛て先にしているとみてよいだろう。その一方で、「X（= やっ君）は P（= 片付ける)」という対比の標識を用いた構文は、「X でない誰かは not P（= 片付けない)」という内容を含みとして持っている。兄弟が並んで勉強しているこの状況において、「X でない誰か」は「(この家庭内の) 兄弟」というカテゴリー集合 (Sacks 1972) に属する「やっ君」でないほう、すなわち「たっ君」を指すと理解できるだろう。よって、この発話は「たっ君は片付けない」という含みを持つように聞こえる。これは一種の皮肉であり、この皮肉はたっ君に向けられている。

実際、やっ君はたっ君のほうに顔を寄せながら、「たっ君だよそれ」と、含みの内容を言語化する（08 行)。と同時に、当のたっ君も「俺は ?」と、母親の発話が自分に向けられた（可能性がある）という理解を示す（09 行)。後続の発話順番で、母親自身も「たっ君だね片付けない° の°」と含みの内容を言語化している（11 行)。

以上見たように、母親の発話 06 は直接的にはやっ君に宛てられているが、そこに込められた皮肉は間接的にたっ君に向けられている。さらに、このアドレスの二重性は参与者たち自身によって理解され、反応されている。

3.2.　野外における祭りの準備作業場面

断片 2 は、筆者らが行っている長野県野沢温泉村でのフィールドワーク（榎本ほか 2018）から取ったデータである。野沢温泉村では毎年、1 月に大きな祭りが行われる。この祭りは、村の 40 代前半の男性たちが半年以上かけて準備する。筆者らは、この準備作

業を逐一ビデオで収録し、大勢の人々が協働で作業する様子や、年長者から年少者へ技能・知識が伝承される過程を分析している。この断片は、10 月に行われる御神木伐り出しという作業の一場面である。

御神木伐り出し作業では、祭りの主役となる社殿の造営に用いる木材を山で伐り出す。この作業は、山棟梁（以下の断片では、山棟）と呼ばれる役職の者が指揮して行う。この断片では、次の年から山棟梁になる次期山棟梁（次山棟）が、見習いとして率先して指示を出している。また、彼らより年長の経験豊富な顧問や、実際に木を切る職人もしばしば助言を与える。この場には、祭りの担い手である三夜講と呼ばれる 100 人近くの集団がいて、木の運搬作業などに携わっている。それ以外に、見学ツアーの客や報道関係者、そして、筆者ら調査チームの面々がいる。

この作業では、高さ 20 メートル近くの巨大な木をチェーンソーで刈り倒すため、大変な危険が伴う。山棟梁たちは、まわりにいる人たちに対して、木が倒れる方向から退避するよう指示を出す。ここでは、この指示の発話とそれに対する筆者（伝）自身の反応を中心に見ていく。

このやりとりにおいては、発話に伴う身振りや、身体動作による反応が重要な役割を果たすため、発話の下（薄い色の行）に身体動作を記述する。[3] また、事例 1 と同様に、各発話行（あるいは、休止中の身体動作の行）の末尾に「((→ X))」の形式で視線の方向（左右はいずれも筆者から見て）を示す。さらに、発話中のいくつかの時点におけるスナップショット画像を図 2 に示し、対応する時点を # 記号で断片中に示す。これらの画像のうち、「カメラ A」と記されているもの（a, c, f）は筆者のカメラで撮影したもので、「カメラ B」と記されているもの（b, d, e）は他の調査者のカメラで撮影したものである。後者のカメラには筆者自身が映っている（画像中に楕円で示されている）。

【断片 2】道祖神祭り準備作業（2018 年 10 月 7 日）

01　職人：　もしかし [たらもっと下へ　] ((→左後方))
02　山棟：　[あっち >行くかも<] ((→左後方))
03　*(0.26)
　　次山棟：　* 右手を左に 2 度振る ->l.06 ((→左後方))
04　職人：　[下　へ　] ((→左後方))

[3] 身体動作の記述には以下の記号を用いる（https://franzoesistik.philhist.unibas.ch/fileadmin/user_upload/franzoesistik/mondada_multimodal_conventions.pdf）。「*」：次期山棟梁の身体動作の変化点（発話中に対応する位置を示す）、「+」：筆者の身体動作の変化点、「$」：三夜講や他の人たちの身体動作の変化点、「*->」：以降の行まで身体動作が継続（「l. 数字」で行番号を示す）、「*->>」：その断片以降まで身体動作が継続、「->*」：以前の行から身体動作が継続。

05　山棟：　[行くかも] 知んねえし :#（(途中から、→職人)）
　　図　　# 図 2a
06　　+(0.19)*(0.47)#
　　次山棟：　->* 後方を指差す ->（(→左後方)）
　　伝：　+ 後方を振り返る ->
　　図　　# 図 2b
07 →　次山棟：　こっち +(.) こっ* ちこっち [来て]*（(→左後方)）
08　山棟：　[こっ]* ちへ =（(→後方)）
　　次山棟：　->* 右手を左に振る* 後方を指差す ->l.10
　　伝：　->+ 次山棟に視線を戻す
09 →　次山棟：　=+ みんな（(末尾で、→右前方)）
　　伝：　+ 後方を振り返る ->l.12
10　　*(0.6)
　→　次山棟：　* 右手を左に 3 度振る（(途中から、→左後方)）
11 →　次山棟：　も [っと+ 下：(.) 下にいて　]#（(→左後方)）
12　山棟：　[こ - + こ - この - このくらい] によけてて =（(→右後方)）
　　伝：　->+ 右方向に移動 ->
　　図　　# 図 2c / d
13　山棟：　= も [$ らって]（(→右前方)）
14 →　顧問：　[$ ノリフ] ミの後ろのブナよ + り向こう #（(→後方)）
　　伝：　->+ ノリフミの後ろで停止
　　一同：　$ 右方向に移動 ->>
　　図　　# 図 2e
15　一同：　はい + はいはいはい（(口々に)）
　　伝：　+ さらに右方向に移動 ->
16　次山棟：　で切り +# 始めたら :(.) 木から目離すなよ：(（→移動する人たち)）
　　伝：　->+ ノリフミの斜め後方で停止
　　図　　# 図 2f
17　　(0.15)
18　一同：　は : いはいはい（(口々に)）

職人と山棟梁は、「もしかしたらもっと下へ」「下へ」(01, 04 行)、「あっち > 行くかも <」「行くかも知んねえし :」(02, 05 行) と、木が倒れる方向について予想を述べる。これを受け、次期山棟梁は右手を左に 2 度振る身振りを行い、木が倒れる方向にいる人たちに対して退避するよう指示を出す (03 行、図 2a)。この身振りは、筆者から見て（カメラ

A）左後方を見ながらなされており、そのあたりにいる人たちに宛てているとみなせる。筆者は次期山棟梁にもっとも近い位置に立っているが、次期山棟梁は筆者に視線を向けておらず、この身振りの宛て先に筆者は含まれていない。実際、筆者は左後方を振り返ることでそのような理解を示している（06 行、図 2b）。次期山棟梁はついで、やはり筆者の左後方の人たちを見ながら「こっち（.）こっちこっち来て」「みんな」（07, 09 行）と宛て先を明示しつつ、右手を左に 3 度振る（10 行）。これらの発話と身振りによる指示は後方にいる人たち全体に宛てられている。筆者はここでも左後方を振り返り、これらの発話や身振りが自分より後方にいる人たちに宛てられたものであるという理解を示す（09 行）。

しかし、次期山棟梁が「もっと下 :（.）下にいて」と指示を続けるやいなや（11 行）、筆者は（自分の）右方向に向かって移動を始める（12 行、図 2c）。筆者から見た（カメラ A）次期山棟梁の視線や身振りは図 2d であり、明らかに筆者に直接宛てられたものではない。この時点で場所の移動を始めていることは、自分に直接宛てられていない発話や身振りで遂行される指示行為が、暗に自分も含んだ、次期山棟梁の前にいる人たち全員に向けられたものであると、筆者が理解していることを示している。

（a）　指示を出す次期山棟梁（カメラ A）

（b）　後方を振り返る伝（カメラ B）

（c）　動き始める伝（カメラ B）

（d）　後方に声をかける次期山棟梁（カメラ A）

(e)　指示を出す顧問（カメラ B）

(f)　ノリフミの斜め後方で停止（カメラ A）

図 2　断片 2 のスナップショット画像

次期山棟梁の指示に重ねて、山棟梁は「こ - こ - この - このくらいによけててもらって」と、筆者の右後方あたりを指差しながら、次期山棟梁への助言を行う（12, 13 行）。すると、今度は顧問が両手を突き出しながら、「ノリフミの後ろのブナより向こう」と、より具体的な退避点を指示する（14 行、図 2e。ノリフミは顧問の身体方向の先、筆者のすぐ前にいる）。「ノリフミ」（仮名）は前三夜講の道祖神委員長の 1 人の名前である。第三者を名前、すなわち認識用指示表現（recognitionals）（Sacks and Schegloff 1979）で指示することは、受け手がその人物を知っていると話し手が仮定していることを含意する。「ノリフミ」は現三夜講の人たちにとって認識可能な名前であり、このことはこの発話が三夜講の人たちに宛てられたものであるという理解をうむだろう。もちろん、当地で長年フィールドワークを行っている筆者もノリフミをよく知っている。しかし、そのことは顧問には自明ではないかもしれない。筆者はこの発話の時点ですでにノリフミの後ろあたりまで移動を終えていたが（14 行）、この発話を受けてさらに右方向に移動し（15 行）、ノリフミの斜め右後方で停止する（16 行、図 2f）。すなわち、顧問の発話を自分に直接宛てられたものではないとみなしつつ、その発話が遂行する指示行為を自分にも向けられたものと理解している。

以上見たように、次期山棟梁や顧問の発話や身振りは、直接的には自分たちの仲間である三夜講の人たちに宛てられているが、それによって遂行される指示行為は眼前で撮影している筆者にも間接的に向けられている。さらに、このアドレスの二重性は筆者自身によって理解され、適切に対処されている。

3.3.　格闘技道場における技術指導場面

断片 3 は、筆者自身が通っている柔術道場で収録したデータである。[4] この道場のテク

[4] 本事例のより詳細な分析と考察については、伝（近刊予定）を参照のこと。

ニック練習では、毎回、指導者が選んだテーマに沿って柔術の技術が実演を伴って説明され、練習生たちはそれを反復練習する。柔術は絞め技と関節技を主体とする組み技格闘技であり、空手の型のように 1 人で実演することはできない。そのため、指導者はその日出席している練習生たちの中から協力者（通常、もっとも経験が長く、技能が優れた練習生）を指名し、2 人で技を実演する。指導者と協力者のあいだに事前の打ち合わせはなく、協力者はどんな技を実演するか事前に知らされていない。そのため、指導者の説明の発話や身振りの中から自分が次にどう動くかのヒントを見つけ出し、指導者との協働的な実演を達成しなければならない。

この断片は、テクニック練習開始 15 秒後、この日のテーマ「パスガードに対する防御」を指導者が告知した直後の場面である。[5] 指導者（T）はマットに寝転んでいる。協力者（P）は指導者の正面に立って、腰にあてがわれた相手の両足の膝の内側の胴衣を掴んでパスガードの準備態勢に入っている（図 3a 参照）。断片 2 と同様、発話の下（薄い色の行）に指導者（t）と協力者（p）の身体動作を記述する。[6] また、各発話行の末尾に視線の方向を示す。「((→ P))」は協力者への視線、「((→ S))」はまわりで見ている練習生たちへの視線である。さらに、発話中のいくつかの時点におけるスナップショット画像を図 3 に示し、対応する時点を # 記号で断片中に示す。画像中の太い矢印は指導者の身体動作の方向、細い矢印は視線の方向を示す。

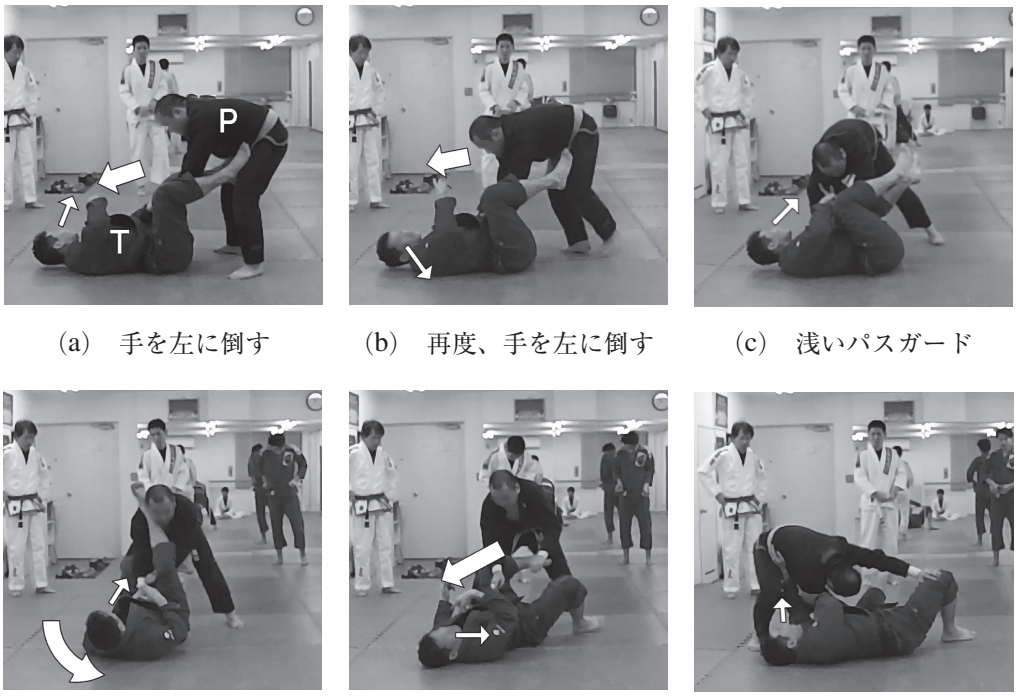
【断片 3】柔術の技術指導（2016 年 1 月 23 日）

```
01      T:   う：んと：*(0.1) じゃ *こう (.) # ((→ S))
        t:                 *右手を P の前に突き出す
                                     *右手を左に倒す ->
        図                                   # 図 3a
02      T:   *> な + んでもいいんです = ((→ P))
        t:   *右手を P の前に戻す ->
        p:       ->+T の両足を押さえ込む ->
03 →    T: = *けど <+ してくる # でしょ *: ((→ S))
   →    t:   *右手を左に倒す ---------- *静止
        p:           +左側面に出る ->
        図                       # 図 3b
```

[5] パスガードとは、マットに寝た状態の相手が両足で攻め手の進行をブロックしている（ガードポジション）のに対して、相手の足をどかして胴体の横に回り込む技術である。

[6]「*」は指導者の身体動作の変化点、「+」は協力者の身体動作の変化点を示す。

04 T: で*して +# きて：((→ P))
t: *左手を P の右膝下に置く
p: -> +静止
図 #図 3c
05 (0.2)
06 T: も*+ ちろんこういうふうに足とかで (0.8) ((→ P))
t: *P の右肩に右足を引っ掛けて体を回す ->
p: +T にコントロールさせる ->
07 T: やって (.) できる* # うちはいいんです+ け *ど：((→ P))
t: ->*P の正面に戻る ----------*右足を下ろす
p: -> +上体を起こす ->
図 # 図 3d
08 *+(0.4)
t: *右手を P のほうに突き出す
p: +左手を下ろしかけて止める ->
09 → T: *ちょっとあ *+# いてが深めに = ((→ S))
→ t: *右手を左上方に倒す
*静止
p: ->+左手を T の右膝に置く ->
図 # 図 3e
10 T: = + 入 *ってきてちょっとなかなか足を +# 利かすのが ((→ P))
t: *両手で P を止めようとする ->
p: +T の頭まで回り込む ----------+ 静止
図 # 図 3f
11 (0.4) *(0.3) ((→ S))
t: ->*右手で P の右肩を軽くたたく ->
12 T: むず *かしいな +:っていう *とき ((→ P))
t: -> *右手を P の右上腕に移動する
*左手を P の右脛に移動する
p: +T にコントロールさせる ->>



(a)　手を左に倒す　(b)　再度、手を左に倒す　(c)　浅いパスガード

(d)　正面に戻る　(e)　手を左上方に倒す　(f)　より深いパスガード

図 3　断片 3 のスナップショット画像

指導者は、まず「う : んと :(0.1) じゃこう (.)」と言いよどみながら、右手を協力者の前に突き出し、その手を左に倒す (01 行、図 3a)。この動作は一見すると、協力者に直接宛てられた身体動作による指示に見えるかもしれない。しかし、この発話と動作のあいだ指導者の視線は奥側の練習生に向けられている (図 3a の細い矢印)。また、この手を倒す動作は「こう」という指示語の産出と同期している。したがって、指導者のこの身体動作は、練習生たちに宛てた発話に伴う身振りと理解できる。指導者は、「> なんでもいいんですけど <」と早口で挿入句を挟み (02 行)、もう一度右手を協力者の前に戻し、突き出した手を再び左に倒しながら、「してくるでしょ:」と続ける (03 行、図 3b)。この手を倒す動作も、指導者が視線を手前側の練習生に移動するあいだになされており (図 3b の細い矢印)、練習生たちに宛てた発話に伴う身振りとみなせる。しかし、手を倒す動作が 2 度繰り返されたことは、協力者にとって特別な意味を持つであろう。協力者は、2 度目の手を倒す動作を「自分がなすべき行為」の暗黙的な指示ととらえ、その動作に合わせてパスガードを仕掛ける (図 3b の協力者の足に注目)。

ここで、指導者は倒した手をしばらく静止しながら (03 行末尾)、「で」と発話を再開する (04 行)。手の位置を保持することで協力者のパスガードの停止位置を示すとともに、「で」という談話の区切りを示す標識によって、説明が次の段階に移ることを予示してい

る。これに呼応するように、協力者はパスガードの動作を指導者の手の位置で停止し、静止状態になる（04 行、図 3c）。通常の対戦状況であればここから抑え込みにいくところである。ここでは、協力者は静止して指導者の説明の続きを待っているように見え、指導活動にともに参与していることへの志向性を示している。

さて、指導者は「もちろんこういうふうに足とかで（0.8）やって（.）できるうちはいいんですけど :」と言いながら、協力者の右肩に自分の右足を引っ掛けて体を回し、協力者の正面に戻る（06, 07 行、図 3d）。指導者のこの発話は文法的にいくつかの特徴を備えている。まず、「X（＝足とかでやってできるうち）は P（＝いい）」という対比の標識を用いた構文は、「X でない（＝足とかでやってできない）状況は not P（＝よくない）」ことを匂わせている。また、節末の逆接の接続助詞「けど」は、「いいんです」とは逆の（守り手にとって）「よくない」状況が後続の節で述べられることを文法的に投射している。これらのことは、「足とかで対処できない、よくない状況」がこのあと導入されることを予示している。

しかし、この段階では、次に説明される状況が正確にどういうものであるかまでは協力者にはわからないかもしれない。ここで、指導者は右手を協力者のほうに突き出し（08 行）、「ちょっと」と言いながらその手を左上方に倒す（09 行前半、図 3e）。この手を倒す方向は、01 行（図 3a）、03 行（図 3b）のときよりも上方、自分の頭のほうである。この方向の違いは重要である。パスガードで回り込む位置の違いを暗示しているように見えるからである。指導者は倒した手を保持しながら、「あいてが深めに」と発話を続け（09 行後半）、先ほどより上方に倒された手の位置が、パスガードを仕掛ける相手にとって「深め」の位置であることを示している。このことを理解した協力者は、指導者が「入ってきて」と続けるあいだに、指導者の頭のあたりまで回り込み、停止する（10 行、図 3f）。ここでも、指導者の手を倒す動作は、視線を手前側の練習生に向けながらなされており（図 3e の細い矢印）、協力者に直接宛てられていない。この動作は「ちょっとあいてが深めに」という発話に同期して産出されており（09 行）、「攻め手が深めにパスガードしてくる」ことを示す身振りとみなせるだろう。しかし、直接自分に宛てられていなくとも、協力者はこの身振りを自分に向けられた指示ととらえ、協働的な実演を構成する適切な動きを産出している。

以上見たように、指導者の発話や身振りは、直接的には、まわりで説明を聞いている練習生たちに宛てられているが、そこに暗示された次の動きの指示は協力者に向けられている。協力者は、指導者の説明に埋め込まれた対比の構文や逆接の接続詞による文法的な投射を利用して、その後の発話中のキーワード（「深め」）や以前とは異なる身振り（上方向き）の意味を解釈し、指示の内容を理解している。

4. 議論

ここまで、まったく異質な 3 つの場面で、発話の直接の宛て先でない、間接的な標的に対してなんらかの行為が向けられる事例を見てきた。断片 1 では、家庭内での親子の教育場面において、母親が年少の息子に宛てた発話に込められた皮肉が、隣に座っている年長の息子に向けられる事例を見た。断片 2 では、野外における祭りの準備作業場面で、山棟梁たちが作業仲間に宛てた退避の指示が、撮影している筆者にも向けられる事例を見た。断片 3 では、格闘技道場における技術指導場面で、指導者が練習生たちに宛てた技の説明の発話や身振りが、一緒に実演している協力者に向けた身体動作の指示にもなっている事例を見た。

このようなアドレスの二重性をどのように考えればよいだろうか。伝達意図に依拠する従来のコミュニケーション理論でうまく扱えるのだろうか。以下では、Clark and Carlson（1982）が提案した「告知優先仮説」を拠り所として考察を進めよう。

1 節で挙げたような例をもとにして、Clark and Carlson（1982）は以下の 3 つの仮説を提示している（p. 333）。[7]

（1）　参与者仮説（Participant Hypothesis）
発語内行為には、受け手（addressee）としての聞き手に向けられる（directed at）ものもあれば、参与者（participant）としての聞き手に向けられるものもある。

（2）　告知仮説（Informative Hypothesis）
参与者指向発語内行為の基本的なものは、話し手が受け手に対して遂行している発語内行為を同時にまた、参与者全体に告知するというものである。

（3）　告知優先仮説（Informative-First Hypothesis）
すべての受け手指向発語内行為は告知を介して遂行される。

1 節に挙げた例と類似の以下の例を考えよう。

【Clark and Carlson（1982: 336）（9）より】
Ann:　((to Charles, in front of Barbara))
Charles, I insist that Barbara tell you who we met at the museum today.

[7] Clark and Carlson（1982）は、発話や発語内行為の直接の宛て先にも、間接的な標的にも、同じ “addressee” という用語をあてている。本稿では、これを「受け手」と訳出する。また、発語内行為を受け手に “direct at” することを「向ける」と訳出するが、脚注 1 の区別に従えば、これは「（宛て先に）宛てる」「（間接的な標的に）向ける」の両方の意味を含む。

Ann の主張は Charles に宛てられているが、それが遂行する間接的な依頼は Barbara に向けられている。告知優先仮説によると、直接的な主張も間接的な依頼も、その遂行を Barbara と Charles の両者に告知することを介して遂行されるという。つまり、Charles に主張を宛てていることは Barbara にも告知され、それによって Barbara に向けた間接的な依頼が遂行されるということである。これらの受け手指向・参与者指向の発語内行為には伝達意図が伴っているとされる。すなわち、話し手は、告知を介して受け手指向発語内行為を遂行することを意図している。

Clark and Carlson（1982）はこの過程を以下のように図式化している。

【Clark and Carlson（1982: 364）（66）より】（A = Ann, B = Barbara, C = Charles）
告知（A, B & C, I_1）⇒ I_1 = 主張（A, C, ‘B must tell C who A & B met’）
↓
告知（A, B & C, I_2）⇒ I_2 = 依頼（A, B, ‘B tell C who A & B met’）

`⇒’ は「告知を介して受け手指向行為を遂行する」ことを表し、`↓’ は発語内行為の間接性を表す。従来の間接言語行為の理論（Searle 1975）とは異なり、間接性は、「主張→依頼」のような受け手指向行為のレベルではなく、告知のレベルで生じると考える。ここでは、直接的な発語内行為である主張と、間接的な発語内行為である依頼の間で受け手が変化しており（側面的間接発語内行為（lateral indirect illocutionary acts）と呼ぶ）、受け手指向行為のレベルでの間接性ではこのことを説明できない。

さて、この図式を使って、これまでの断片を検討してみよう。まず、断片 1 は以下のように図式化できるだろう。

【断片 1 の図式化】
告知（母親 , やっ君 & たっ君 , I_1）⇒ I_1 = 言明（母親 , やっ君 , ‘やっ君は片付ける’）
↓
告知（母親 , やっ君 & たっ君 , I_2）⇒ I_2 = 皮肉（母親 , たっ君 , ‘たっ君は片付けない’）

母親がやっ君に宛てた「やっ君は片付ける」という言明はたっ君にも告知され、それによってたっ君に向けた「たっ君は片付けない」という間接的な皮肉が遂行される。母親はこの発話がたっ君に向けた皮肉として聞かれることをおそらく意図していたであろう。それだけでなく、やっ君に宛てた当の発話をたっ君に聞かせることによって間接的に皮肉を遂行することを意図していたと言ってよいだろう。それまで自分の勉強に専念していたたっ君が、母親の発話をきちんと理解し、皮肉に反論するかのように「俺は ?」と反応するのは、母親のこの伝達意図を認識したからだと考えられる。

次に、断片 2 は以下のように図式化できるかもしれない。

【断片 2 の図式化】

告知（次山棟 , 三夜講 & 伝 , I_1）⇒ I_1 = 指示（次山棟 , 三夜講 , ‘三夜講が退避する’）

↓

告知（次山棟 , 三夜講 & 伝 , I_2）⇒ I_2 = 指示（次山棟 , 伝 , ‘伝が退避する’）

断片 1 とは異なり、ここでは、三夜講の人たちに宛てられた発語内行為も、筆者に向けられた発語内行為も、いずれも同じ退避の指示である。ここでの間接性は、受け手の違いに関してのみ生じている。その一方で、この大人数の相互行為場面で、筆者も含めた、その場にいる人たち全員に告知を認識するよう意図されていたと言えるだろうか。Clark and Carlson（1982）は、告知（参与者指向行為）は「参与者全体（all the participants fully）」に向けられるとしているが、野外で大人数が共在している状況において、どの範囲までが参与者に含まれるのかについては議論が必要であろう。[8] 筆者がこの告知をもとにして退避行動を取ったことは間違いないが、そこに次期山棟梁や顧問の伝達意図があったかどうかはわからない。筆者が退避行動を取ったのは、彼らの伝達意図を認識したからではなく、長年の経験に基づいて自発的に判断したからかもしれない。

最後に、断片 3 は以下のように図式化できるかもしれない。

【断片 3 の図式化】（練＝練習生たち、協＝協力者）

告知（指導者 , 練 & 協 , I_1）⇒ I_1 = 言明（指導者 , 練 , ‘協力者がパスガードしてくる’）

↓

告知（指導者 , 練 & 協 , I_2）⇒ I_2 = 指示（指導者 , 協 , ‘協力者がパスガードする’）

ここでは、練習生たちに宛てた「協力者がパスガードしてくる」という言明が協力者にも告知され、それによって協力者に向けた「パスガードせよ」という間接的な指示が遂行されているようにみえる。しかし、気づきの標識や逆接の接続詞（「あでも」）に前置され、発話として独立していた断片 1 の母親の言明とは異なり、断片 3 の指導者の言明は、複数の文や節を連ねて産出される大きな発話単位（multi-unit turn）の中に埋め込まれている。協力者の身体による反応はそのタイミングが極めて重要であり、それを見極めるためには、指導者の説明のどの部分が自分に向けられた間接的な指示なのかを理解しなければならない。指導者の発話は、からなずしもその部分を顕著化するようには構成されていない。[9] さらに、練習生たちに宛てた言明が協力者にも告知されているとは言えても、協力者に向けた間接的な指示が練習生たちにも告知されているとは必ずしも言えない。少なく

[8] さまざまな種類の参与者については、Goffman（1981）や Clark（1996）などの議論も参照。

[9] 身振りの随伴はそのような顕著化の手がかりとなりうるかもしれないが、この点はより詳細な検討が必要である。

とも、告知のレベルの間接性が伝達意図を伴っているとは言えないのではないか。協力者の適切なタイミングでの適切な身体反応は、指導者の伝達意図を認識したものというよりも、むしろ協力者の長い経験と優れた技能に支えられているように見える。

5. まとめ

本稿では、発話の直接の宛て先でない第3の参与者になんらかの行為が間接的に向けられているとみなせる事例を検討した。まったく異質な3つの相互行為場面の収録データの微視的分析によって、間接的な行為が遂行される過程を詳述した。さらに、Clark and Carlson（1982）の告知優先仮説を拠り所として、それらの事例を伝達意図とアドレス性の観点から吟味した。

これらの考察の結果は、一対一のやりとりを前提にした従来のコミュニケーション理論の拡張の必要性を示唆している。Clark and Carlson（1982）のモデルはそのような拡張の1つであるが、そこにはまだ以下のような問題がある。

1. 参与者とは何か。どの範囲までが告知が向けられる参与者か。
2. 発語内行為の間接性の対象となる発話（の部分）はいかにして限定されるか。その顕著化のための手段は何か。
3. すべての告知に伝達意図が伴うのか。伝達意図に依拠しない行為遂行の達成もあるのではないか。[10]

これらの問いに答えるには、コミュニケーションの理論的考察を深めるとともに、日常の相互行為場面のつぶさな観察が不可欠である。

参照文献

Clark, H. H. 1996. *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Clark, H. H. and T. B. Carlson. 1982. “Hearers and Speech Acts.” *Language* 58, 332–373.

伝康晴. 近刊予定.「身体的実演を伴う教授場面の相互行為分析──アドレス性に注目して──」田中 廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）『動的語用論の構築へ向けて』第3巻.

Endo, T. 2018. “The Japanese Change-of-State Tokens *A* and *Aa* in Responsive Units.” *Journal of Pragmatics* 123, 151–166.

榎本美香・坊農真弓・細馬宏通・伝康晴・高梨克也・寺岡丈博・阿部廣二・坂井田瑠衣. 2018.「祭りの伝承にみられる共同体〈心体知〉」『社会言語科学』20（2）, 52–62.

[10] 木村（2003）も議論しているように、これは側面的間接発語内行為に限らず、コミュニケーション一般の問題である。

Goffman, E. 1981. *Forms of Talk*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.

Grice, H. P. 1969. “Utterer’s Meaning and Intentions.” *Philosophical Review* 78, 147–177.

木村大治. 2003.『共在感覚──アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都：京都大学学術出版会.

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉. 2019.『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版 コーパスの設計と特徴』(国立国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書 3). 国立国語研究所.

Lerner, G. H. 2003. “Selecting Next Speaker: The Context-Sensitive Operation of a Context-Free Organization.” *Language in Society* 32, 177–201.

Levinson, S. C. 1988. “Putting Linguistics on a Proper Footing: Explorations in Goffman’s Concepts of Participation.” In P. Drew and A. Wootton (eds.) *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, 161–227. Cambridge: Polity Press.

Sacks, H. 1972. “On the Analyzability of Stories by Children.” In J. J. Gumperz and D. Hymes (eds.) *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, 325–345. Oxford: Basil Blackwell.

Sacks, H., E. A. Schegloff, and G. Jefferson. 1974. “A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation.” *Language* 50, 696–735.

Searle, J. 1975. “Indirect Speech Acts.” In P. Cole and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*, *3: Speech Acts*, 59–82. New York: Academic Press.

Shannon, C. and W. Weaver. 1949. *The Mathematical Theory of Communication.* Urbana, IL: The University of Illinois Press.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition* (2nd edition). Oxford: Blackwell.

高梨克也. 2016.『基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法』京都：ナカニシヤ出版.

谷 泰 (編). 1997.『コミュニケーションの自然誌』東京：新曜社.